

方劑名	生薬構成 および製法・服用方法
音順	傷寒論・金匱要略条文
	読み および解説・その他
まー1	<p><b>麻黄湯</b></p> <p><b>麻黄</b> (苦温) 3g・<b>桂枝</b> (辛温) 2g・<b>甘草炙</b> (甘平) 1g・<b>杏仁</b> (甘温) 湯に浸し皮尖を去る 3g</p> <p>上の4味を水 360ml を以って、先ず<b>麻黄</b>を煮て 80ml を減じ、諸薬を加え 100ml に煮詰め、滓を去り 3回に分けて温服する。</p> <p>服後は衣類で体を覆って、しっとりと汗をかかせる。温かい粥を服む必要はない。後は<b>桂枝湯</b>の煎方その他に準ずる。</p>

弁太陽病脈証併治中第六第五条 (傷寒論)

「太陽病、頭痛発熱、身疼腰痛、骨節疼痛、惡風、汗無くして喘する者、**麻黄湯**之を主<sup>つかさど</sup>る。」

解説 太陽病で、頭痛がして、発熱し、体がうずき、腰が痛んで、骨の節々がうずき痛んで、惡風があつて、汗が出ず、ゼイゼイする者には、**麻黄湯**が主治する。

寒邪が、衛気の虚に乗じて侵入し、宗気を冷やし、宗気により循らされている血が冷えて滞ることにより惡寒が生じ、また血が循らないので、筋肉や関節も冷えて痛みが生じる。宗気が冷えると、これ以上寒邪に侵入されては困るということで、衛気が腠理を閉じるために汗が出なく、衛気も発散されないために発熱する(この発熱は、比較的高熱で表実熱という)。また寒邪が侵入すると、容易に生体の陽気が損傷され、陽気が虚すと温煦作用が損なわれ、そのために惡寒が生じることも考慮する必要がある。

**麻黄湯**証の場合は、衛気の虚は、**桂枝湯**の衛気の虚に比べて程度が軽いので、寒邪による凝滞も強く、寒邪に対する衛気の抵抗も強いために惡寒も強く、腠理を閉じる力も強いために、発熱も強く現われ、無汗となる。

太陽傷寒(**麻黄湯**証)は、表実で、発熱(比較的高熱)、無汗、惡寒、身体痛、脈浮、緊の主証候がある。

**桂枝湯**証の場合は、元來衛気が虚しているために、寒邪が容易に侵入したもので、宗気は冷えが少ないので惡風になる。また宗気の軽度の冷えは、表部分の血の軽度の冷えによる滞りを生じさせる程度であるので、この発熱は、衛虚による自汗により発散されるため、微熱になる。

太陽中風(**桂枝湯**証)は、表虚で、発熱、自汗、惡風、脈浮緩の主証候がある。

**麻黄湯**証の病變の要点は、衛気の閉塞であり、衛気が閉じる原因は、外寒が凝滞することにある。故に治療は、辛温の**麻黄湯**により、寒邪を解表散寒する。

**麻黄**は、経脈を温めて、陰気を補い、血流をよくする。**芍薬**は、経脈の熱を取り、宗気(陰気)を補う。**杏仁**は、表が閉じたために、肺気の宣散肅降が障害されて、そのために上逆して喘が現われるが、その喘を制す。**桂枝・麻黄**は、表を開き、陽気を発散させる、そのために汗が出る。

「方劑決定のコツ」の注釈

寒を感じると、エクリン腺が閉まり、内から外へ出て行く熱がこもってしまう。**麻黄**は、体表の鬱熱を取るのがその働きである。

体表の裏にある鬱熱は、水によって汗として取られる。水は漢方的には陰であり、熱は陽である。内に鬱した陽は、陰の力を借りないと、外に出すことが出来ないのである。

**麻黄湯**証

新古方薬囊によれば「発熱、頭痛、首すじ、背中、腰などが痛み、息早く、咳出で、或は鼻塞がりて通ぜず、或は咽喉痛み、或はゼイゼイと喘し、寒気ありて汗の出でざる者。以上の證ある者にてても全体に氣力が少なく、脈沈なる者には用うべからず。熱はある無しに拘わらず汗無きが本方の要なり。脈沈と言ふは、軽く手を握ったのでは感ぜず、きゅつと強く押して始めてよく判る脈の事なり。風邪、その他に本方を用いる所甚だ多し。」と記されている。

弁太陽病脈証併治中第六第六条 (傷寒論)

「太陽と陽明との合病、喘して胸滿の者<sup>くだべ</sup>下す可からず。宜しく**麻黄湯**之を主<sup>つかさど</sup>るべし。」

解説 太陽の経と、陽明の経とが同時に侵されて発病し、ゼイゼイして、胸が満って一杯になる者は、下してはいけない。その場合には**麻黄湯**が主治する。

濇理が閉じて、衛気(陽気)が滞ることにより、肺気が宣散されずに、肺の腑である大腸に影響を及ぼし、腑気が通降できず、喘して、胸滿、大便不通がみられる。この場合は、太陽経の熱が陽明の腑まで内攻した腑の熱である陽明内実証(裏実熱)では無いので、攻下してはならない。この場合は、**麻黄湯**で解表宣肺し、肺気が宣散肅降すると、喘して胸滿、大便不通共に癒える。

参考 合病と、併病との区別は、合病は、病勢が強く、表裏が同時に病むものをいい、併病は、初め太陽病を起こして治り切らない内に陽明病を發して、太陽と陽明を病むものをいい、治療法も異なることがある。

弁太陽病脈証併治中第六第七条 (傷寒論)

「太陽病十日以去、脈浮細にして臥を嗜<sup>たしな</sup>む者は外已<sup>すで</sup>に解する也。設し胸滿脇痛する者は**小柴胡湯**を与え、脈ただ浮の者は**麻黄湯**を与う。」

解説 太陽病に罹って 10 日を過ぎて、脈が浮いて細く、横になっていたがるものは、表の邪が既に解したのである。もしその場合に胸滿、脇痛のあるものは、**小柴胡湯**を与えてやりなさい。脈が浮いて(細の無いもの) いるだけのものには、**麻黄湯**を与えなさい。

太陽病に罹って 10 日を過ぎて表証が治ってくると、脈は浮でも落ち着いて穏やかになる。しかし治ったばかりの時には、脈は浮でも、体力が回復していないので、力が無く細であり、まだ正気不足なので、静かになって寝ていたがるが、表の邪がすでに解したのである。もし、これが脈沈細で、嗜臥ならば、悪化して少陰病になってしまった状態になる。胸滿や、胸脇痛があるのは、少陽病になってしまったもので、脈は弦となる、**小柴胡湯**が主治する。脈が浮のまま、細が無いなら、身痛もあるはずで、**麻黄湯**を与えるべきである。

弁太陽病脈証併治中第六第 16 条 (傷寒論)

「太陽病、脈浮緊、汗無く発熱身疼痛し 8、9 日解せず、表証仍お在り。此れ當に其の汗を發すべし。薬を服し已り微除、其の人發煩、目瞑劇しき者は必ず衄す。衄すれば乃ち解す。然る所以の者は陽氣重なるが故也。**麻黄湯**之を主る。」

解せず、仍お、在り、當に、已り、發煩、目瞑、衄す、乃ち、然る所以の、主る

解説 太陽病で、脈が浮いて緊の状態、汗がなく、発熱があつて、体がうずき痛み、8、9 日経っても治らずに、表証が相変わらずあるものは、当然、汗を發してやるべきである。発汗剤を服用させたら、少し楽になったけれども、暫くしてから、病人が苦しみ出して、目が見えなくなる様にひどくなる者は、必ず鼻血を出す。鼻血が出れば治る。その理由は、病邪の熱と、発汗剤の熱の陽気が重なるからである。それには**麻黄湯**が主治する。

弁太陽病脈証併治中第六第 21 条 (傷寒論)

「脈浮の者は病表に在り、汗を發す可し麻黄湯に宜し。」

解説 脈が浮いている者は、病邪が表に在るのであるから、發汗をしてやればよい。それには麻黄湯がよい。  
但し、無汗の病状があると思われる。

弁太陽病脈証併治中第六第 22 条（傷寒論）

「脈浮にして數の者は、汗を發すべし、麻黄湯に宜し。」

解説 脈が浮いていて、早い者は、病邪が表にあつて、熱を持っているから、汗を發してやればよい。それには麻黄湯がよい。

弁太陽病脈証併治中第六第 25 条（傷寒論）

「傷寒脈浮緊、汗を發せず、因つて衄を致す者、麻黄湯之を主る。」

解説 傷寒で、脈が浮いて、緊である者が、發汗しないために、熱気が表にこもり、鼻血の出る場合は、麻黄湯が主治する。  
鼻は、陽明經の支配を受けている。表が閉じたために、滞った熱（表実熱）は、太陽經から少し深い所にある陽明經に内攻する。陽明經に内攻した熱は、汗と共に出られなくなる。陽気は上昇する性質があるので、行き場が無くなった熱（陽氣）は上行して鼻から出ようとする。この時鼻出血を起こすことになる。この鼻出血により、快方に向かうこともあるが、麻黄湯で陽気の發散を助けた方がよい。

麻黄湯証

表実熱症で、發熱、惡寒、惡風、無汗、關節の痛み、頭痛、脈浮數緊、喘、鼻出血などの症状がある。

麻黄湯は、裏の虚や、裏の寒がある時は禁忌である。

弁陽明病脈証併治第八第 53 条（傷寒論）

「陽明の中風は脈弦浮大にして短氣し、腹都て滿ち、脇下及び心痛み、久しく之を按ずれども氣通ぜず、鼻乾汗するを得ず。臥を嗜み、一身及び面目悉く黄、小便難、潮熱有り、時々嘔し、耳前後腫れ、之を刺せば小しく瘡ゆれども外解せず、病十日を過ぎ脈續いて浮なる者は小柴胡湯を与う、脈但だ浮にして余証なき者は麻黄湯を与う。若し尿せず腹滿、嘔を加うる者は治せず。」

都て、嗜み、悉く、嘔し、小しく瘡ゆれども、解せず、但だ、若し

解説 陽明の經が風に当てられて、脈は弦で、浮いて大きくし、呼吸が早くて苦しく、腹全体が張って脇腹の下から心臓の辺りまで痛み、長い間腹や脇をさすっても、氣が通じないために痛みや張りが治らずに、鼻が乾いて、汗が出ないで、横になりたがり、体全体から顔や目まで、全て黄色になり、小便が出にくく、時々シャックリをする。耳の前や後が腫れているものを、鍼してやれば少し良くなって軽くなるが、熱は取れない、この様な病状が 10 日も続いて、脈が浮いているものは、小柴胡湯を与えてやればよい。脈がただ浮いて、裏の証の無いものは、小柴胡湯では治らないので、麻黄湯を与えるとよい。ただし小便不利、腹滿、シャックリは、麻黄湯では治らない。

弁陽明病脈証併治第八第 56 条（傷寒論）

「陽明病、脈浮、汗無くして喘する者は汗を發すれば則ち癒ゆ。麻黄湯に宜し。」

解説 陽明病で、脈が浮いて、汗がなく、喘する者は表実であり、陽明の經にやや熱邪がある状態であるが、發汗すれば治るのである。  
麻黄湯がよろしい。